

## 十二月感泣集

### 机の上

机の上に虫籠を置いた  
虫籠の中に小型の椅子を入れた  
椅子は指先で安定させるには時間がかかった  
その椅子に小さな姿の僕を坐らせた  
自分を見つめてみて一時間もたつたらうか  
疲れたので僕は椅子と虫籠を片づけた  
我にかへつて現在僕のみる書斎が虫籠であることに気がついた  
今度この僕をとり出してくれるのはどなただらうか  
自分で自分に敬語をつかふのはをかしいかなと考へた  
それにしてもどンドン夜は更けて行く

### マスク

マスクをしてゐる自分が  
ガラス窓にうつるのを見るのが好きだ  
そこにあるのは自分でない部分が大部分だからである  
赤いマスク 緑のマスク 黄色のマスク  
混乱した自分を求めてゐる自分の姿はそれなりに存在感がある  
少年の群れが追つてきて  
僕に石を投げつけることもある

### 屋根

ねむりから覚めた  
電話のベルが鳴つてみた  
はげしい風の音に気がついた  
「朝早くから失礼だとは思ひますが  
お宅の屋根がめくれあがつてゐますのでお知らせします」  
近くに住む女の人からであつた  
外に出て斜めの角度から屋根を見上げた  
龍の首のやうにめくれあがつて  
トタンが細長く空に立つてゐた  
はげしく音をたてて 身もだえして  
生きてゐるかのやうに伸びをして僕を威嚇した

僕は家を失ふことになるのか  
茅葺であればゆがんだ菱型になつて  
空を飛んで行つてしまつたであらう。  
僕の家屋根の場合ははげしい音をたてて  
千切れきれないで大空に喰らひかかつてゐる  
棟梁に電話をかけた  
何も出来ないで立つてゐる僕の前で  
彼はさっさと屋根にのぼって太い釘を打ちつけてくれた  
吹き飛ばされて谷の方へ落ちて行く茅葺の屋根  
それは以来  
僕の心の中を飛ぶ  
トタンのきしみの音を混ぜることもある

追悼

### 1 丸山 透

君だと思つて眺めてゐよう  
はるかな沖  
明確にひるがへる白い波  
互の関係は  
はかなかつたけれど  
通ひあふものがあつた

### 2 一色春海

伝聞にもとづくことだからちがつてゐるかもしれない  
しかし僕にとってこのことは僕と君との関係の一番なつかしい思ひ出だから大切なのだ  
小学三年の編入試験に合格して転校して来た僕と君とは はじめての友人になつた  
あの時二人は教室の窓から紙を千切つて飛ばした  
風に乗つて白い細かい紙切れは藤棚の上を舞つた  
君は大学は慶應に行つた  
芥川君に聞くと劇団を作つて活動してゐるといふことだつた  
日劇小劇場の仕事をしてゐるとも聞いた  
クラス会で逢ふ機会もなかつた  
あの女優が幕切れに大股びらきでかつぎあげられた一瞬  
降るやうな白い細かいライトが  
股の内側のすべてを照し出してゐる迫力

「あ 一色君の演出だ」と思った  
風に散らした白い紙の散乱  
見上げながら僕はあの時二人で飛ばした紙切れを  
今度はあびてあるかのやうになつかしかつたのだ  
一色君はどう生きたのか  
それは知らないけれど  
僕には彼をこのつくりあげられた空想の中でわすれることが出来ない